

見えづらいものだからこそ

大嶋 栄子

その女性の赤いペティキュアは、半分くらい剥げかかっていた。リビングにあるガラステーブルの上には500mlの缶酎ハイが5、6本ある。その他にも何かアルコール飲料が見えたが、半分は開封されていない。一旦飲み始めると、おそらく自力で止めるのは難しいだろう。この1年で、飲酒時に記憶が欠落するブラックアウトの症状が何度もあり、気づくと知らないオトコが横で寝ている。なぜそうなったか全く覚えていないことが繰り返されていた。彼女はそうした現状を変えたいと思いながら、行動は正反対の方向へと突き進んでしまう。「オトコさえいれば大丈夫」、「申し訳なくて、先生(主治医)にはもう会えない」。泣きながら、両極の間を言葉は行き来する。

私はこれまで「さまざまな被害体験を背景にもつ女性」の支援を行ってきた。特にアルコールや違法薬物などの「依存症」と呼ばれる疾患の背景には、暴力の傷が深く埋め込まれていることが多い。身体的暴力は誰にとっても想像しやすいものだが、私が気になるのは、むしろ静かな暴力だ。特にこの10年ほど前から、主宰するNPOには「見過ごされた障がい」に、依存症など二次的に発生する精神疾患が重なる利用者が増加している。「見過ごされた障がい」とは、自閉症スペクトラムをはじめとする発達障がい、そして軽度の知的障がいである。

親が徹底して、子どもを他の子と同じように「普通である」枠組みの中に押し込めること、あるいはその子の存在を気にかけるのを止めてしまう遺棄(ネグレクト)、どちらも見えづらいが暴力であるが故に「彼女たちが抱える生き難さ」は周囲の理解を得ることが難しい。冒頭の女性も、アルコールが止まった後に、発達障がいとの折り合い方を見つけていく必要がある。酔いは束の間の休息をもたらすと同時にリスクもあるが、今日はこのまま帰るしかないと、私は彼女の部屋を後にした。次回に差し伸べる手を、どうすれば彼女が掴めるのか。それを考え工夫するのは、私たちの仕事なのだと思う。



PROFILE

おおしまえいこ：ソーシャルワーカー。NPO法人リカバリー代表。北星学園大学大学院社会福祉研究科博士後期課程単位取得退学。博士(社会福祉学)。精神科病院、民間カウンセリングルームを経て2002年、社会的困難の状態にある女性支援の場を立ち上げる。著書に『“嵐”のあとを生きる人たち―「それいゆ」の15年が映し出すもの』(かりん舎, 2018)、『生き延びるためのアディクション―嵐の後を生きる「彼女たち」へのソーシャルワーク』(金剛出版, 2019) などがある。